

オトナのための日本語塾

レポート集 2021

武庫川女子大学言語文化研究所 編

まえがき

この冊子は、武庫川女子大学言語文化研究所による「オトナのための日本語塾」（以下、日本語塾）に参加された“塾生”による報告集です。日本語塾は、日本語の表現と理解のあり方について、ワイワイと楽しみながら考えてみようという場です。言語研究者ではない、ごくフツウの人たちが集まって学んでいます。

今年度は、コロナ禍の中、感染症の波の少ない時期にできる限りの対策をして、なんとか5回の開催をすることができました。塾生の人たちの協力のおかげです。

さて、今回、レポートの形式を少し変更しました。大学生が授業で提出するような、いわゆるレポートの形式だけでなく、新たな形式のものを加えました。それは、少し変わったことばの現象、例えば、一般的ではないけれど気になる表現、日本語としてちょっと変だけどももしろい表現、表現した人の事情を想像したくなる言葉など、見たり聞いたりしたものを分析して報告するというものです。

題して「見たヨ・聞いたヨ」です。この企画は、白状しますと、日本語研究者にとってレジェンドのような存在である雑誌からのパクリです。かつて日本語の調査研究を真剣に行っていた国立国語研究所という組織が、深く編集にまでかかわっていた雑誌がありました。『言語生活』という名前で、筑摩書房から1951年に発刊され1988年まで続きました。その雑誌で人気のあったコーナーが、「目・耳」「カメラの散歩」と題するものでした。「目」は書きことば、「耳」は話しことばに関して、上に述べたようなことがらを取り上げていました。「カメラの散歩」はその証拠写真付きというものです。

さらに言うと、日本語塾では、ふだんから、このような気になる表現を、塾生それぞれが見つけてきて、その現象をみんなで分析するということをしています。だから、塾生の人たちも書きやすいし、読んでくださる方も読みやすいだろうともくろんだわけです。

さて、実際にどうなのか、ぜひごらんくださるようお願い申し上げます。そして、自分も参加してみたいという方はぜひご連絡ください。

塾長 佐竹 秀雄

目 次

まえがき

佐竹 秀雄

レポート

- 〈あふれる〉と〈はみだす〉の使い分け 上野 和美 - 3 -
- オトナのための動物園 竹腰 純 - 11 -
- 「ちよろちよろ」をめぐって 谷本 由希子 - 21 -

見たヨ・聞いたヨ

- こってり中 - 27 -
- 自宅でのみとり - 27 -
- 急いで募集 - 28 -
- 卒業 - 28 -
- かなあと思います - 29 -
- 「一味」と「一党」 - 29 -
- 枅記号 - 30 -
- 上積む - 31 -
- 失敗されました - 32 -
- 「組んずほぐれつ」の表記は「わかりづらい」 - 32 -

上野 和美・高野 啓・谷本 由希子・東村 洋子

- 《記 録》 - 33 -

〈あふれる〉と〈はみだす〉の使い分け

上野 和美

1. はじめに

中国人留学生から日本語についての質問を受けた。蓋のないごみ箱に容量を越えるほどのごみが入っていて、さらに積み上がった状態を何と表現すればよいのか、と。彼はこの内容をイラストで私に伝えた。所属する研究室のごみ箱がそのような状態であり、日本人学生に伝えて一緒にごみの処理をしたいのだが、その際に状況をどう表現すればよいかわからないと言う。彼なりに考えた表現は「ごみのはみでている」であった。おそらく伝わるであろう。「ほら、はみでているから、捨てに行きましょう」とごみ箱を指させば、間違いなく意図は伝わる。しかし、日本語母語話者なら通常「はみでている（／はみだしている）」と言わずに、「あふれている」と言うのではないか。

直観的に捉えると〈あふれる〉は対象が液体のようなもので、〈はみでる／はみだす〉は線のような平面的なものである。ごみの場合は積み重なって容量を越えるので、〈あふれる〉のイメージに近い。質問にはそう答えたものの、辞書を引くと「布団から綿がはみでる」「袋がやぶれて中身がはみでる」など、固体（＝立体物）の用例があり、自分の回答が適切であったのか、だんだん訝しく思えてきた。そこでこれらの語の意味や使われ方の違いについて調べてみた。

本稿では〈あふれる〉と〈はみだす〉の二語について、辞書の語釈や用例をもとにし、現代日本語の中でどのような使い分けがなされているのかを考察する。〈はみでる〉でなく〈はみだす〉にしたのは、辞書で〈はみでる〉を調べると、概ね〈はみだす〉を参照せよと記されていて、〈はみだす〉から派生したものと考えられるからである。したがって〈はみでる〉は、〈はみだす〉に含め、補足的に扱うこととする。

用いる主な辞書は『精選版日本国語大辞典』（以下、『日国』と記す）、『デジタル大辞泉』（以下『大辞泉』）、『明鏡国語辞典』（以下、『明鏡』）、『新明解国語辞典』（以下『新明解』）である。

2. 辞書における語釈と用例

まずは、これらの語が辞書でどのように扱われているかを押さえておきたい。語釈と用例を示し、気づいたことを記す。

2.1 〈あふれる〉

『日国』

《自ラ下一》（「あふれる」とも）

①水などがいっぱいになってこぼれる。

「大中姫の捧げたる^{まり}鏡の水^{あふれ}溢^{たぶさ}て腕^こに凝れり」(『日本書紀』720)

「血^{あぶ}溢れて注ぐが如く」(宮崎柳条『造化妙々奇談』1879-80)

②こぼれるかと思われる程にいっぱいになる。また、感情や才気などがいっぱいに満ちている。

「あふれみたる兵共」(『平家物語』13C 前)

「眉や目の間に才気が^{あふ}溢れて見える」(森鷗外『ぢいさんばあさん』1915)

③余り者になる。おちぶれる。零落して放浪する。

「見苦しきさまにて世にあふれんも知らず顔にて聞かんこそ心苦しかるべけれ」(『源氏物語』1001-14 頃)

④法を外れた言動をする。無法なふるまいをする。

「浪花の市中をあふれありく五人男といふ者あり」(浄瑠璃・蝶花形名歌島台 1793)

⑤仕事、獲物などにありつけない結果になる。

④余されて使ってもらえなくなる。仕事にありつけない。買い手がつかないで残る。

「おちやをひくをあふれるといふはあまれるなり」(随筆・麓の色 1768)

「職業紹介所からあふれて来た老人連が」(横光利一『高架線』1930)

⑥狩猟や釣りで、獲物がとれない。

「他所で聞いたのとはまるで反対に、何処の漁場もみんなひどくアブれてみた」(長田幹彦『滯』1911-12)

『大辞泉』

《動ラ下一》

①水などがいっぱいになって外にこぼれる。

「コップにあふれるほど注ぐ」

「川があふれる」

「涙があふれる」

②人や物が入りきらないではみだす。また、入りきらないほど多くある。

「通路まで人があふれる」

「スタンドにあふれる観衆」

③感情・気力・才気などがいっぱいに満ちている。

「意欲あふれる作品」

「夢と希望にあふれる青春」

『明鏡』

《自下一》

①中のものが収まりきれなくなって外にこぼれる。

「水槽から水があふれる」

「升から米があふれる」

「豪雨で川（の水）があふれる」

「参列者が歩道にあふれる」

「目 から/に 涙があふれる」

「あふれんばかりの荷物を積む」

②こぼれるほどいっぱいになる。

「観光客が町にあふれている」

「市場には輸入品があふれている」

③感情や気持ちが表情などとなって外に現れる。

「彼は自信にあふれている」

「彼の顔は歓喜にあふれている」

『新明解』

《自下一》

①そこに収まりきらなくなって、一部が外に出てしまう。

「あふれ落ちる涙」

「川（の水）があふれる」

「広場にあふれる群衆」

②包み隠すことの出来ないものが感得される。

「街にあふれる師走景気」

「活気があふれる」

「滋味あふれる文章」

「喜びに胸があふれる」

『日国』『大辞泉』の一つ目の語釈に「水などがいっぱいになって」とあるが、〈あふれる〉は液体の容量オーバーを言い表すのがもっとも典型的であろう。『明鏡』『新明解』も用例にも「水」が使われている。そこから、感情や表情のように、湧き出るイメージのもの、つまり本来は量をはかることができないものについても言い表すようになっていったと考えられる。

『日国』の③④⑤は、現代日本語では「あふれる」という別語である。

『大辞泉』では、語釈②で〈はみだす〉を使って〈あふれる〉を説明している。それだけこ

これらの語には意味的な近さが認められるということである。ただし、〈あふれる〉は〈はみだす〉よりも〈こぼれる〉との方が、類義性が高いと思われるのか、『大辞泉』『明鏡』には〈こぼれる〉との違いについての解説がある。

『明鏡』では語釈①が「～こぼれる」であるのに対し、②は「こぼれるほど～」とあり、実際にこぼれているのか、こぼれていないのかは問題にしていない。②の用例に挙げられているのは「観光客が町にあふれている」と「市場には輸入品があふれている」である。観光客や輸入品の場合、何をもって容量オーバーと捉えるのかが曖昧であるため、「いっぱいだ、たくさんだ」と感じられれば〈あふれる〉と表現するのだと考えられる。『大辞泉』の語釈②も同様に「入りきらない」と「入りきらないほど」とを並列させているが、用例はやはり「人」である。これらは一種の比喩といえる。ただし、対象が人である点では同じであっても、「通路まで人があふれる」「参加者が歩道にあふれる」のようにあふれ出た先の場所（通路・歩道）が示されると比喩ともいえない。収容基準を越えていることは視認できる。

比喩表現の典型は、先述したように感情や表情、気配、味わいなどについての表現であり、『明鏡』③と『新明解』②の語釈によると、それらは本来、内に収まっているものである。「喜び」や「意欲」「活気」など、よいイメージを喚起させるものが用例に挙げられているが、怒りや悲しみ、喪失感などの描写にも使える。

2.2 〈はみだす〉

『日国』

《自サ五（四）》

①中にきちんとおさまらずに、外部へふくれ出る。すきまから外へあふれ出る。一定の範囲から一部が外へ出る。また、一定の規範に適合せず、そこからはずれる。はみでる。

「御いんきよはめかけのせきにはみ出され」（雑俳・末摘花 1776-1801）

「中から古新聞が^{はみだ}溢出してある」（小杉天外『魔風恋風』1903）

②食べ始める。食いだす。

『大辞泉』

《動サ五（四）》

一定の範囲・枠から出る。中に入りきれないで外へあふれ出る。はみでる。

「毛布から足がはみだす」

「見物人が車道まではみだす」

「既成の枠からはみだした大型新人」

『明鏡』

《自五》

ある範囲や枠におさまらないで外へ出る。中に入りきらないであふれ出る。はみ出る。
「観客が廊下まではみだす」
「伝統の枠からはみだした作風」

『新明解』

《自五》

収まるべき枠の中に収まらず外へ出る。

「会場からはみ出す」

「枠から（／枠を）はみ出す」

「綿のはみ出した布団」

〈はみだす〉は、「はむ」と「だす」の複合であり、「だす」が他動詞であるにもかかわらず、〈はみだす〉は自動詞である。また、漢字表記をすれば「はむ」は「食む」である。「食む」には「侵食する、そこなう、害する」の意があり、「蝕む」が「虫が食む」に由来することや、月が欠けて見える現象を「月食（月蝕）」と表現することを考えると、侵すように他の領域に至ることを「食み出す」と表してもおかしくない。しかし、一般的には「はみだす」もしくは「はみ出す」と表記されることの方が多いと感じる。

『日国』『大辞泉』『明鏡』は、いずれも語釈で「あふれ出る」という語を用いている。やはり〈あふれる〉とは意味的に近いことを表している。

また『大辞泉』『明鏡』『新明解』は、「枠から出る」「枠におさまらない」「枠の中に収まらず」と、「枠」という概念使って説明している点で共通している。『大辞泉』の用例の「毛布から足がはみだす」も『新明解』の用例の「綿のはみ出した布団」も、その状況を真上から（あるいは真下から）見れば、毛布や布団は「枠」と捉えることができる。そして、この「枠」は毛布や布団のような具体物から目に見えない抽象的なものにまで用いられるので、「既成の枠からはみ出した新人」「伝統の枠からはみだした作風」のような使い方に発展する。〈はみだす〉の比喩的な用例と捉えられるだろう。

2.3 〈はみでる〉

『日国』

《自ダ下一》→はみだす①

「上着を棚尻のはみ出る程、あと高く」（洒落本・温海土産 1857）

「鴨長明は、その社会的存在自体が不条理、かつはみ出た人、であった」（堀田善衛『方丈記私記』1970-71）

『大辞泉』

《動ダ下一》→「食^はみ出す」に同じ。

「袋が破れて中身がはみでる」

『明鏡』

《自下一》

はみ出す。

「布団から綿がはみでる」

『新明解』

「はみだす」のやや改まった表現。

1.で述べたように、『新明解』以外は、〈はみだす〉を見よと記され、単独の語としての記述は少ない。〈はみでる〉は、〈はみだす〉の派生語と解釈できよう。『新明解』は「『はみだす』のやや改まった表現」としていて、「改まった」を「正式だが少し堅苦しい表現¹」と捉えると他の辞書とは解釈が異なる。しかし、〈はみだす〉では言い表しにくいニュアンスを伝えるため、例えば「(意図的に)出したのではなく出た」ことを強調するために使うというような、通常とは違う特殊な場合の表現を「改まった表現」とするなら、他の辞書と同様とも考えられる。「改まった」の意味のとりかた次第であり、よくわからない。

限られた記述、用例の中で気づくのは、〈はみだす〉には、規範から外れるという比喩的な用法があるのに対し、〈はみでる〉には少ないことである。「袋が破れて中身がはみでる」も「布団から綿がはみでる」も非常に即物的な描写である。『日国』の鴨長明評の「はみ出た人」は比喩的な用法であるが、1970年と比較的新しいものである。

3. 〈あふれる〉と〈はみだす〉の違い

〈あふれる〉も〈はみだす〉も、一定の基準に収まらずにそれを越えるという点では共通している。しかし、何が越えるのかで対照すると、〈あふれる〉のコア・イメージは、液体のように量で示されるものであるのに対し、〈はみだす〉は、輪郭として線で示し得るものである。これは立体的であるか、平面的であるかの違いともいえる。

〈あふれる〉において、才気や、意欲、夢、希望、歓喜、活気、景気などは、目に見えないが、大きく捉えるとどれも「気」のようなものであり、それは液体と同様、流れるイメージを持つ。また、「升から米があふれる」の場合も、米粒が集まって「流れ」を形成しているとみなすことができる。つまり、量が増えるという変化を「流れ」としてイメージできるもの

¹ 『新明解』の見出し語「改まる」には、「改まった(=正式だが少し堅苦しい)表現」という用例がある。

が〈あふれる〉の対象だといえる。「通路にまで人があふれる」や「広場にあふれる群衆」のように人に対して使う場合も、やはり人々の動きを「流れ」として捉えていると考えられる。

一方、〈はみだす〉は、流体のイメージを持たない。単に線を越えれば〈はみだす〉であり、容量という概念とは別のものである。2.2で述べたように、〈はみだす〉は枠からの逸脱として捉えられるが、それは本来、枠内に収まっていることが正常、望ましい、一般的であると認識されているものである。「毛布と足」「布団と綿」「会場と観客」「伝統と作風」のいずれも、収まっていると落ち着くという関係にある。極論すれば、〈はみだす〉と表現するときには、背後に何らかの規範的な認識が存在すると考えられる。

さらに、「流れ」であるかどうかは、言い換えれば、変化が連続的であるかどうかということである。〈あふれる〉は、量が増えるという変化が連続的であり、徐々に増えていった結果、基準を越えるのである。だが、〈はみだす〉はそうとは限らない。膨れ上がるように徐々に外に出る場合もあるが、いきなり越える場合もある。例えば、「参列者が歩道にあふれている」と「参列者が歩道まではみだしている」を比べると、前者は、敷地内の参列者と外に押し出されて敷地から一番遠いところにいる参列者との間は、人で埋め尽くされている。人のいない空間はない。しかし、後者は、極端な場合、誰か一人が飛び出るように歩道にいたとしても構わない。敷地という枠からラインオーバーしていれば〈はみだす〉は成立する。ただし、その一人はあくまでも参列者という集合の一部と認識されなければならない。ひとまとまりであるものの一部が枠から出ているということが必要である。

別の例を引く。道路表示のセンターラインは、(車両がそのラインを越えて)「道路の右側にはみ出して通行してはならない」ことを表す。それは車が単独でそのラインを越えた場合を想定している。その車の左側に他の車が並んでいる必要はない。もし、センターラインを越えるのが〈あふれる〉のような連続的変化であるなら、道路の左端からセンターラインまで、隙間なく車で埋まっていなければならない。また、陸上競技の投擲などにおいても同様に、規定の線をひょいと一歩踏み越えてしまえば、はみだしたことになる。基準(となる線)を突然越えたような変化に対しても〈はみだす〉は使える。

つまり、量の連続的な増加と認識されれば〈あふれる〉を、単に一部分が線を越えた状態であると認識されれば〈はみだす〉を使うのではないだろうか。

4. おわりに

日本語学習者である留学生の質問から、これまで意識したこともない語に光をあて、使い分けの問題について考えることとなった。どのような意識で使ってきたかを自分自身に問い直すのはおもしろくもあり、難しくもある。再度説明させてもらえるなら、もう少しうまく伝えられだろくに、と悔やまれる。

今回の調査のきっかけとなったごみの容量オーバーのイラストであるが、実はそれは断面図のように描かれたものであった。簡単に状況を説明するときには、大抵の人はそうするだろう。しかし、もし彼が立体的に描いていたらどうだっただろうか。私はよく考えもせず、

『あふれる』という動詞を使うのが一般的でしょうね」と答えてそれで終わりだっただろう。また、そもそも「流れ」として捉えにくい「積み上がっていくごみ」を彼が叙述の対象としていなければどうだっただろう。私はこれらの動詞に向き合うことすらなかった。そう考えるにつけ、実に鋭い質問をしてくれたものだと感じる。

〈はみだす〉という語一つをとっても、私たち母語話者には、運筆練習でなぞり書きをするとき、色鉛筆やクレヨンを使ってぬり絵をするとき、列を作って歩くとき、集団で体操をするとき、など幼い頃からあまりにも当たり前で使ってきたので、改めて考えるという機会はない。それだけにいつも新鮮な問いを投げかける日本語学習者の存在はありがたい。自分の内にある意識を見直すきっかけになる。

〈あふれる〉VS 〈はみだす〉の最後に、スーパーや食料品店などで見かける「詰め放題」について触れたい。定額で袋や容器に商品を好きなだけ入れてよい、というものである。ピーマンやにんじんなどの野菜から、ドライフルーツやクッキーなどのお菓子まで対象商品はいろいろある。ルールも、蓋ができること、袋が破れていないこと、レジまで持って来られることなどさまざまである。その詰め放題において、袋や容器に収まりきらないものはどのように表現されるだろうか。容量のオーバーなので、やはり〈あふれる〉と言うのか、それとも蓋ができない状態を上から見て〈はみだす〉と言うのか。また、棒状のものが上方に突き出ているような場合は〈あふれる〉と言わず、〈はみだす〉と言うのか、あるいは〈はみでる〉というのか……。ごみと同様、少し特殊な場面である。しかし、それゆえに自分が捉えたイメージで母語話者は言葉を選ぶような気がする。現場で確かめてみることを自身の課題としたい。

【参考文献】

小学館国語辞典編集部編『精選版日本国語大辞典』小学館、2006年
松村明監修『デジタル大辞泉』小学館、2020年
北原保雄編『明鏡国語辞典』[電子辞書]大修館書店、2002-2006年
山田忠雄編『新明解国語辞典』第八版 三省堂、2020年

オトナのための動物園

竹 腰 純

1. はじめに

コロナ禍の運動不足解消のため、毎日一万歩を目標に散歩を始め二年が経過した。早朝の散歩では、新聞配達バイクや物流のトラック、夕方の散歩では学校帰りの学生とすれ違うことが多い。時間帯を問わず、すれ違うのは犬の散歩をしている人達である。その姿を眺めていると「犬が西向きゃ尾は東」「犬も歩けば棒に当たる」「犬猿の仲」などの諺・慣用句を思い出した。また、ペットを飼う家庭の増加が影響しているのであろう、動物病院の多さにも驚く。診察動物も犬、猫以外にウサギ、ハムスター、フェレット、モルモット、小鳥、爬虫類と多岐に渡る。そこで犬以外の動物の諺・慣用句にも興味が湧き、『故事俗信ことわざ大辞典第二版（小学館）』を引いて動物が主役の諺や慣用句を調べてみることにした。動機となった「犬」を含む諺は343件、「猫」は248件の候補があった。余りの多さに戸惑いを感じたので、十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）に絞って調べ、その動物の特徴が読み取れる諺・慣用句を抽出してみた。（動物名の後の件数は候補数）

2. 十二支

2-1 ねずみ（子／鼠）≪165件≫

齧歯目のうち主にネズミ亜目に属する哺乳類をさす。体長5～35㎝。尾は細長く無毛。門歯が発達し、一生伸び続け、硬いものを噛むのに適応している。繁殖力が強い。人家にすむ種は食料品や家財を荒らし、病原体を媒介する。野外にすむ種も農作物などを加害する。全世界に分布し、種類が多い。（大辞林 第四版）

【頭の黒い鼠】鼠が物をかすめとるように、物を盗む人。家の中の物が急になくなった時などに、頭髪の黒い人間を鼠になぞらえて、犯人は鼠でなく人間であろうとほめかしている。

【家に鼠、国に盗人】^{ぬすびと}大小の差はあるが、どんな社会にも害をなす悪者がいるというたとえ。

【窮鼠猫を噛む】弱い者や身分の低い者でも絶体絶命の立場に追いつめられると、強い者に反撃を加えることのたとえ。また、必死の覚悟をきめれば、弱い者でも強い者を苦しめることのたとえ。

【^{たいざん}大山鳴動して鼠一匹】前ぶれの騒ぎばかり大きくて、実際の結果はきわめて小さく取るに足らないことのたとえ。

【時に遇えば鼠も虎になる】よい時機にめぐりあうと、つまらない者でも出世して権勢をふるうようになるというたとえ。

【鼠壁を忘る、壁鼠を忘れず】鼠は以前にかじった壁のことなど忘れていますが、壁についた跡は消えずに残っている。害を加えたほうはそのことを忘れていますが、加えられたほうはいつまでも忘れないことのたとえ。

【鼠は社やしろによりて貴たつとし】卑小な鼠も、住みついている社殿のおかげでうやまわれる。社に巣くう鼠をいぶして退治しようとしても、社まで焼く恐れがあるので火をたくわけにいかず、それをよいことにして鼠はますます横行する。君主の側近の小人や悪臣を取り除こうとすると君主まで傷つける恐れがあるので、取り除き難いことのたとえ。

動物の人気投票を見るとネズミは嫌いな動物の上位にあり、諺・慣用句でも悪者として扱われている。一方その繁殖力の高さから、実験用の動物として重用されているが、残念ながらその特徴もマイナスに捉えられ、非合法利殖の代表「ネズミ講」という言葉になっている。

2-2 🐮 うし (丑/牛) ≪306件≫

偶蹄目ウシ科の哺乳類。ヨーロッパなどに分布していた野生の原種（オーロックス）は絶滅し、家畜化されたものだけが現存する。家畜としては、ヨーロッパ系の品種とアジア系の品種（インド牛、ゼブ）の二系統に大別される。古くから乳用・肉用・役用として改良され、現在はホルスタインやヘレフォード、褐毛和種などの品種が普及。（大辞林 第四版）

【商いは牛の涎】商売は、細く長く垂れる牛の涎のように、気長に辛抱強く続けることが大切である。

早く利益を得ようとして、あせってはならない。

【牛に対して琴を弾ず】いくら高尚なことを説き聞かせても、志の低い愚かな者にはなんの役にも立たないことのたとえ。

【牛の歩みも千里】遅い牛の足どりでもたゆまず行けば千里の遠くまでも行ける。怠らず持続すれば成果があがることのたとえ。

【牛売って馬を買う】すぐれたほうに取り換えることのたとえ。牛を馬に乗り換える。

【牛を馬に乗り換える】劣った手段を優れた手段に替える。また、自分にとって都合のよいもの、あるいは好ましいものに替える。牛売って馬を買う。

【牛は牛連れ、馬は馬連れ】同類のものはおのずと連れ立つ。また、同類のもの同士で事を行なうとうまくゆくことのたとえ。

【牛も千里、馬も千里】巧拙遅速の違いはあっても、結局は同じ所に到達するというたとえ。

【馬に乗るまでは牛に乗れ】速い馬に乗る前にのろい牛に乗って慣れる必要がある。高い地位につくには、その前に低い地位にあって力をつけなくてはならない。出世は段階をふむのがよいというたとえ。

ウシは弥生時代の遺跡から骨が発見されるほど人類と長い付き合いがある。鈍さを指摘する諺・慣用句が多いが、時間をかけても達成するという意の諺・慣用句もある。また同じく大形の動物で人類への貢献度が高い「馬」と比較する諺が多い。

2-3 🐯 とら (寅/虎) ≪174件≫

ネコ科の哺乳類。北方に産するものは大きく、体長2.8mに達するものがある。胴が長く足が短い。体は赤茶ないし黄褐色で、胴には黒色の横縞がある。森林や深い茂みに単独ですみ、主に夜活動して鳥獣を捕食する。インド・東南アジアから朝鮮・シベリアまで分布。（大

【危うきこと虎の尾を踏むが如し】きわめて危険なことのたとえ。

【市に虎あり】事実でなくても大勢の人がいうと信じられてしまうこと。また、存在しないことや偽りなどが、まことしやかにいわれることのたとえ。

【騎虎の勢い】虎に乗った者が、途中でおりることができないように、物事の勢いがさかんになって、行きがかり上、中止したり、あとへ引けなくなったりすること。

【虎穴に入らずんば虎子を得ず】虎が住むほら穴に入らなければ、その中にいる虎の子を捕獲することはできない。転じて、目的を達成するためには、身の危険を冒すことも必要だということとえ。

【虎視眈々】虎が獲物をねらって身がまえ、鋭く見つめるさま。転じて、じっと機会をねらい、すきがあればつけ入ろうとうかがうさま。

【前門の虎、後門の狼】一つの危難や障害から身を守っても、さらにまた他の危難や障害が現れることのたとえ。

【虎の威を借る狐】強いものの權威をかさに着ていばる。ずるがしこいもののとえ

【虎は死して皮を留め、人は死して名を残す】虎は死後も毛皮が珍重されるが、人が死んで残す名は長くその人の名誉としてたたえられる。人は死後に名が残るような生き方をすべきである。

トラは猛獣の代表でここに挙げた諺からも恐怖を感じる。一方で母親が子供を非常に大切にすることがよく知られており「虎の子」という言葉は広く知られている。昨今、子供を虐待する親のニュースを耳にすることが多いが、虎の爪の垢を煎じて飲んでもらいたいのものだ。

2-4 🐰 うさぎ (卯/兎) <<96件>>

ウサギ目の哺乳類の総称。耳が長い。前脚が短く、後脚が長く、よく走る。上唇は縦に裂け、いわゆる三つ口で、上顎の門歯が二対ある。草食。野ウサギ類と穴ウサギ類に分けられ、ヨーロッパの穴ウサギを家畜化して品種が多い。肉は食用。チンチラやレッキスは毛皮が珍重され、アンゴラの毛は羊毛などと混紡して糸・織物とする。(大辞林 第四版)

【兎死すれば狐これを悲しむ】同類の不幸をその縁者が悲しむことのたとえ。同類が死ぬのは、自分にも同じ運命が近づいたしるしであるところからいう。

【兎も七日なぶれば噛みつく】性来おとなしいものでも、長いあいだ、たびたびはずかしめると怒りだす。

【兎の毛で突いた程】兎の細く柔らかい毛の先で突いた程度。きわめて軽微、微細なことのたとえ。ほんの少し。

【脱兎の勢い】逃げるうさぎのようなすばやさ。きわめて迅速なさま。

【脱兎の如し】逃げるうさぎのように、非常にすばやさ。きわめて迅速なさま。

【二兎を追う者は一兎をも得ず】二つの目標を同時に追求しようとする、結局、どちらも取り逃がし、失敗することのたとえ。

ウサギは常に肉食動物から狙われる存在であっただけに逃げ足の早さが特徴的である。

ペットでも人気の高い動物だが、諺・慣用句の数は意外と少ない。

2-5 🐉 たつ (辰/龍/竜) <<96件>>

想像上の動物。体は巨大な蛇に似て鱗におおわれ、頭には二本の角と耳がある。顔は長く口辺にひげをもつ。平常は海・湖・沼・池などの水中にすみ、時に空にのぼると風雲を起こすとされる。中国ではめでたい動物として天子になぞらえ、インドでは仏法を守護するものと考えられた。(大辞林 第四版)

【画龍点睛を欠く】物事の最後の仕上げを欠く。全体としては良くできているが、一個所、肝心なところに不備があることのとえ。

【虎口を逃れて龍穴に入る】ようやく虎の前から逃げ出せたと思ったら、今度は龍の住むほら穴に入り込んでしまう。災難が次々に来ることのとえ。

【登龍門】立身出世につながるむずかしい関門。また、運命をきめるような大切な試験。「龍門」は、中国の黄河上流の急流。ここを登りきる鯉は化して龍となるという言い伝えがあり、元来は、「龍門を登る」で、出世の糸口をつかむことをいう。

【屠龍の技】^{とりゆう}高い犠牲を払って学んでも、実際には役に立たない技のとえ。「屠龍」は、龍を殺すこと。龍を殺す技を身につけるのに、多くの費用と時間をかけたが、龍がいなかったのでその技は役に立たなかったという「^{れつぎょこう}莊子/列禦寇」の故事による。

【龍頭蛇尾】頭が龍のようなのに尾は蛇のようであること。初めは盛んで、終わりの振るわないことのとえ。

【龍の鬚を撫でて虎の尾を踏む】大きな危険をおかすとえ。

【龍は一寸にして昇天の気あり】龍の子は一寸ほどの大きさのころから昇天しようとする気概がある。すぐれた人物には幼時から非凡なところがあるというたとえ。

十二支の中では唯一想像の動物だけに諺にもその姿や性質に幅の広さを感じる。また神秘的かつ力強さを感じるため、「龍(竜)」の字は人名に多く使われている。「龍(竜)」は昭和26年(1951年)から人名漢字として使えるようになり、平成24年(2012年)男の子人気の名前ランキング(明治安田生命)では人気の漢字としてランクインしている。

2-6 🐍 へび (巳/蛇) <<220件>>

有鱗目へび亜目の爬虫類の総称。体は細長い円柱形。体長は約10センチから10メートルに及ぶ種までさまざま。四肢を欠き、体をくねらせながら前進する。全身が鱗でおおわれ、表皮が古くなると脱皮する。聴覚はないが、震動やにおいには敏感。卵生または卵胎生。舌は細く、先端が二本に分かれる。小動物を捕食し、鳥の卵も食べる。牙から毒を出す種がある。ほとんどが温・熱帯に分布し、温帯にすむ種は冬眠する。蛙を好むといわれ、また、執念深いなどと嫌われる。古くから人間に恐れられてきた反面、神の使いや大地の主として崇められ、神話・伝説・怪奇物語などに登場する。世界に約2,700種が知られる。(大辞林 第四版)

【牛は水を飲んで乳とし、蛇は水を飲んで毒とす】同じものでも使い方によっては、毒にも薬にもな

るというたとえ。

【鬼が出るか蛇が出るか】次にどんな事態がおこるか分からない予測不能で不気味な状態のたとえ。

【蛇の道は蛇】一般にはなかなか察知できないことも、その世界に身を置く者は、さしたる努力もせずにはわかる。同種の仕事や同じような生き方をしてきた者のすることは、当人と直接関わりがなくてもおおむね見当がつくというたとえ。

【蛇の目を灰汁で洗ったよう】よく光る蛇の目を、さらに灰汁で洗ったよう。光りかがやくさま。また、物の正邪善悪などの真相が明白になるさまのたとえ。

【蛇に噛まれて朽ち縄に怖じる】蛇に一度噛まれてからは、蛇に似た腐りなわを見ただけでもおじけづく。一度の失敗にこりて、必要以上に用心深くなることのたとえ。

【蛇に睨まれた蛙】とても勝ち目のない相手に出会い、恐ろしさのために逃げもかくれもできず身がすくんで動けないようすのたとえ。

【蛇の生殺し】蛇を半死半生にして、殺しも生かしもせずに置くこと。転じて、いためつけてとどめを与えずに放置しておくこと。蛇は執念深い生き物の代表とされ、「蛇の生殺しは人を噛む」と言つて、恨みを受け、後難を招くもとなるという。また、物事に決着をつけず、不徹底のままにしておくことのたとえ。

【蛇は寸にして人を呑む】蛇は一寸ほどの小さなものでも、すでに人を呑もうとする気迫がある。すぐれた人物が幼少の頃から抜きんでた素質を示すことのたとえ。

【藪をつついて蛇を出す】する必要のないことをわざわざしたために、災いを受けることのたとえ。

脱皮を繰り返して成長していくへビは、不死の象徴とされ、神秘的な生き物として捉えられていたこともあり、日本人はへビに対して畏敬の念を抱いているが、鼠同様不人気動物の代表で諺の世界では恐ろしい存在となっている。

2-7 駒うま (午/馬) ≪540件≫

奇蹄目ウマ科の哺乳類。肩高1.2~1.7 疔。長い顔とたてがみをもつ。走ることが速く力も強い。毛色はさまざま。草食。モウコウマを起源にもつとされ、軍用・役用として古くから家畜化された。日本では農耕・運搬・乗用などに使ったが、今日では主に競走用・乗馬用に飼育される。皮・骨・尾の毛なども利用する。(大辞林 第四版)

【鞍上人なく鞍下馬なし】鞍の上の人と鞍の下馬とが一体となったように見える。馬を巧みに乗りこなすさま。

【生き馬の目を抜く】生きている馬の目を抜き取るほど、すばやく事をするさま。また、ずるくて抜け目なく油断がならないことのたとえ。

【牛を馬に乗り換える】劣った手段を優れた手段に替える。また、自分にとって都合のよいもの、あるいは好ましいものに替える。

【馬が合う】どことなく気性が合う。意気投合する。馬とその乗り手の呼吸が本能的にぴったり合う意からいうか。

【馬の耳に念仏】馬を相手にありがたい念仏をいくら聞かせても無駄である。よいことをいくら言い

聞かせてもさっぱり理解出来なかつたり、まるで聞き入れようとせず、ききめのないことのたとえ。

【馬の骨】どこのだれとも素姓のわからない者。何処の馬の骨。

【老いては騏驎も驚馬に劣る】すぐれた人も年老いると働きがひどく劣ることのたとえ。「騏驎」は、一日に千里も走るといふ名馬。「驚馬」は、足ののろい馬。

【牛頭を懸けて馬肉を売る】肉屋が牛の頭を看板にして実際には馬肉を売る。看板によいものを示して悪いものを売る。みかけはりっぱだが内容がこれに伴わないことのたとえ。

【鞍掛け馬の稽古】生きた馬に乗らず、木馬に乗って乗馬の訓練をすること。実地に役立たないむだな修業のたとえ。

【尻馬に乗る】他の人が乗っている馬の後ろに同乗する。転じて、人の言うことやすることによく考えもしないで付き従う。

【馬耳東風】馬の耳に東風が吹いても馬は何も感じないように、人の意見や批評などに心もとめず、聞き流してしまうこと。何を言っても少しもききめのないことのたとえ。

【名馬に癖あり】名馬と呼ばれるほどの馬はどこか癖があるものだ。すぐれた才能を持つ者は強い個性を持つものであるというたとえ。

【瘦せ馬に重荷】やせた馬に何頭分もの荷を負わせる。身分・力量にふさわしくない大任を負わせることのたとえ。

【老馬の智】老いた馬は独自の知恵を持っていて、特に道の判断は正確で迷うことがない。転じて、経験豊富な老人には、学ぶべき点があるというたとえ。

ウマは大型の動物の中でもウシと共に人類への貢献度は飛び抜けて高く、諺の数も非常に多い。牛との比較では圧倒的に馬が優位だが、馬単独では微妙な地位にある。

2-8 🐏 ひつじ (未/羊) <41件>

偶蹄目ウシ科の哺乳類。ヤギに似るが、角は渦巻形。角のないものもある。細く柔らかいちぢれた毛が全身に密生する。性質は温和で、常に群れをつくる。草食性。毛(羊毛)・毛皮・肉・乳を利用するため、古くから世界各地で飼われる。メリノ・コリデル・カラクールなど品種が多い。(大辞林 第四版)

【告朔の餼羊】古くからの習慣は実質的な意義を失って虚礼となっても、害がなければむやみに廃止すべきではないという例え。また、その実を失って形式ばかり残っていることのたとえ。

【屠所の羊】屠場にひかれてゆく羊。刻々と死期が迫ることのたとえ。また、不幸に直面して気力がなくなり、悲しみに打ちひしがれた者。

【亡羊の嘆】学問の道が複雑に分かれているため容易に真理を得られない嘆き。方針があまりに多いため手のつけようがなく途方にくれること。

【迷える羊】群れから離れてさまよっている羊。迷いの多い弱い者のたとえ。

【羊質虎皮】実質は羊であるのに、虎の皮をかぶっていること。外観はすぐれて立派だが、実質はそれに伴っていないことのたとえ。見かけだけまし。

【羊頭を掲げて狗肉を売る】看板には羊の頭を出しておき、実際には犬の肉を売る。見せかけはり

っぱでも、中身がそれにとまなわれないこと、表面と内容が一致しないことのとえ。

羊は身を守るために群を作るが、群を離れると戻れない。また倒れると自分では起き上がれないなど臆病な動物として知られている。諺・慣用句も少ない。

2-9 𧰨さる（申／猿）≪159件≫

霊長目に属する人類以外の動物の総称。顔に毛が少なく、手の指が発達し、すぐれた知能をもつ。狭義にはニホンザルをさす。古くから、神聖視され、馬の守護神とされた。（大辞林 第四版）

【猿臂を伸ばす】腕を長くのばす。「猿臂」は、猿の腕。転じて、長い腕。

【犬猿の仲】犬と猿のように、互いこいがみあう関係。仲の悪いことのとえ。

【猿が髭揉む】人まねをして威厳をつくろうことのとえ。威厳をつくろうために人が髭をなでたりする様子をまねて、猿が髭を揉むところからいう。

【猿の芝居】何のことやら訳がわからないことのとえ。

【猿の尻笑い】猿が自分の尻が赤いことを忘れて、他の猿の尻が赤いと笑う。自分の欠点を棚にあげて、他人をばかにする愚をたとえていう。

【猿の人真似】よく考えもしないで他人の行為をまねること。他人のまねをしてうわべだけ飾ることのとえ。

【猿も木から落ちる】木登りのじょうずな猿でも木から落ちることがある。その道に秀でた名人や達人でも、時には失敗することもあるというたとえ。

サルは人類に近いが故に、比較論から「猿知恵」や「猿真似」など考えが足りないという蔑む意の慣用句や諺が多い。しかし、一方では「神使」として崇められており、日光東照宮の「三猿」は人気者だ。

2-10 𧰨とり（酉／鶏）≪108件≫

キジ目キジ科の鳥。原種は東南アジアの密林にすむセキショクヤケイ。農耕の開始とともに家禽として飼養されるようになり、用途に応じた改良がなされ、多くの品種が生じた。弥生時代にはすでに日本に渡来していた。採卵用の白色レグホン、食肉用のブロイラー・名古屋種、闘鶏用のシャモ、観賞用のオナガドリ・チャボなどの品種がある。（大辞林 第四版）

【鶏群の一鶴】鶏の群れの中に、一羽だけまじっている鶴。凡人の中に一人だけすぐれた人がまじっていることのとえ。

【鶏犬相聞こゆ】鶏と犬の鳴き声があちこちから聞こえてくる。村里が家つづきになっているさま。

【鶏口となるも牛後となる勿れ】大きな集団の末端に連なるよりは、小さな集団でも頭目となるほうがよいというたとえ。

【牝鶏晨す】めんどりがおんどりに先んじて朝の時を告げる。災いを招くとして忌まれた。

【鶏を割くになんぞ牛刀を用いん】鶏を料理するのに、牛を切るような大きな包丁を使う必要はない。

小事を処理するのに、大人物や大げさな方法を用いる必要はない。物の使い道のまちがっていることのとえ。

【雌鶏めんどりにつつかれて時をうたう】夫が妻の言いなりになること、妻の意見に動かされることのとえ。ニワトリは毎朝時を告げ続けてくれているが故に鳴き声に関する諺も多い。また卵には栄養があり、「鶏の初卵を飲むと中風にかからぬ」という播州地方に伝わる俗言もある。

2-11 いぬ（狗／犬）《343件》

食肉目イヌ科の哺乳類。オオカミを家畜化した動物と考えられている。よく人になれ、番用・愛玩用・狩猟用・警察用・労役用などとして広く飼育される。品種が多く、大きさ・色・形などもさまざまである。（大辞林 第四版）

【犬が西向きや尾は東】きわめてあたりまえで、分かりきったことのとえ。

【犬に論語】どんなに道理を説いて聞かせても効果がなく、むだであることのとえ。

【犬の遠吠え】臆病者がかげで虚勢をはり、人の悪口をいうことのとえ。弱い犬は遠くから人に吠えかかるところからいう。犬の長吠え。また、犬の遠吠えは不幸の知らせとする俗信も各地にある。

【犬は三日飼えば三年恩を忘れぬ】犬は三日養っただけで、三年もの間その恩を忘れない。犬が飼い主になつきやすく、飼い主によく従うことをいったもの。

【犬も歩けば棒に当たる】なにかやっているうちには、思いがけない幸運に遭うこともある。才能のない者や身分の低い者でも、正直に励んでいるうちには報われることがある。また、物事を積極的に行なう者は、それだけ災難に遭うことも多い。

【犬も食わない】なんでも食べるはずの犬でさえ食べない。非常にいやがられること、人から全く相手にされないことのとえ。

【犬も朋輩、鷹も朋輩】狩猟用の犬と鷹とは、その受ける待遇は違っていても、同じ主人を持つ仲間である。役目や地位に違いがあっても、同じ主人を持てば同僚であることに変わりはない。

【飼い犬に手を噛まれる】配下の者やかわいがっていた者から、思いがけない攻撃を受けたり、裏切られることの例え。

【犬猿ただも畜ならず】犬と猿の関係どころではなく、もっと仲が悪い。

【吠える犬は噛みつかぬ】よく吠える犬は、滅多に噛みつかない。人をおどしたり、むやみに威張る者は、大して実力を持っておらず、たいていは何も出来ないというたとえ。

イヌは動物の人気投票では常に一位で、最も古くから家畜化され、現在日本では五世帯に一世帯がイヌを飼っているとの統計がある。しかし諺の世界では人気のある動物とは思えない。

2-12 いのしし（亥／猪）《19件》

イノシシ科の哺乳類。体長1.5m前後。ブタの原種。ブタに似るが、犬歯が下顎から上方へ突き出る。体毛は硬く暗褐色。山林原野にすみ、夜行性で雑食。肉は山鯨・ぼたんと呼し

て食用とする。(大辞林 第四版)

【後先見ずの猪武者】ただ強いだけで前後の分別もなく、向こう見ずに突進する武者。思慮分別のない人。

【猪首馬足虎背中】いくびうまあしとらせなか醜い容貌や武骨なからだつきのたとえ。

【兜を猪頸に着的】いくび兜を少し上向きにしてかぶる。敵を恐れぬ、勇敢なさま。

【猪突猛進】一つのことに向かって、向こう見ずに猛烈な勢いで、つき進むこと。(大辞林 第四版)

【山より大きな猪は出ない】誇張が限度を越えている。相手の話が大きすぎるときに水を差すことば。また、容れ物より大きな中身はないというたとえ。

イノシシは突進力が強い反面、神経質で知能も高いことで知られているが、諺の世界では突進力が目立っている。

3. まとめ

ここまで動物(十二支)が主役の諺・慣用句を調べてきた。人類と動物との間に続く深い関係があるが故に、現在も多数使われていることが理解できた。動物が諺の世界では、過激な表現を婉曲化するために役立っていることも分かった。更に、ヒトは比較をしたがるもので、諺の中に複数の動物を並べ優劣をつけていることも分かった。ここに取り上げただけでも、鼠と猫、鼠と虎、牛と馬、虎と狼、虎と狐、兎と狐、龍と蛇、龍と虎、牛と蛇、蛇と蛙、羊と虎、羊と狗、犬と猿、鶏と鶴、鶏と犬、犬と鷹と多数あり各々の特徴を上手く利用していた。

「ことわざ」をいくつかの辞書で引くと説明文に共通して載っているのは「古くから」「言い伝え」「教訓」「風刺」「金言」「警句」「短い言葉」という語である。落ち込んでいる人には勇気を与え、増長している人には謙虚さを教え、油断している人には警鐘を鳴らし、ヒトの成長に貢献してきたと思われる。

令和4年(2022年)は寅年である。「寅」の字がつく著名人に明治11年(1878年)11月28日東京市麴町区で高知県土族寺田利正、亀夫妻の長男として誕生した寺田寅彦がいる。この日が寅年寅の日であったことから寅彦と命名された。東京帝国大学理科大学に入学、実験物理学科を首席で卒業、その後地球物理学関連の研究分野で功績を残した。一方で若い頃から俳句を趣味とし、科学と文学を調和させた随筆も残している。「天災は忘れた頃にやってくる」は著書の中にはないが、寅彦の言葉と言われている。また昭和10年(1935年)の浅間山小噴火に際して「大したことはない」という考えと「いやそうではない」との考えが交錯したときに「ものを怖がらな過ぎたり、怖がり過ぎたりするのは易しいが、正當に怖がることはなかなか難しい」とエッセー『小爆発二件』に書いている。「正當に怖がる」ことの重要性をこの時代に説いている。

このレポートを書いている時にトンガ附近で海底火山が爆発した。その翌々日は阪神淡路大震災から27回目の1月17日であった。テレビを見ていると最近「地震速報」が頻りに流れる。また火災も多い。3年目に突入したコロナ感染もあり息が抜けない日々が続く

ているが、そろそろ普段の生活が戻ることを期待して次の諺でこのレポートを締め括る。

【冬来たりなば春遠からじ】

【備えあれば憂いなし】

「ちょろちょろ」をめぐって

谷 本 由 希 子

1. はじめに

「ちょろちょろしないの！」

通勤電車の中で、母親が子に向かって言った。立っている母親のそばで子どもが電車の揺れを楽しむように、混雑する車内で前後左右に2、3歩進んでは戻り2、3歩進んでは戻りを繰り返していたのだ。

「ちょろちょろ」と聞いて、「水がちょろちょろ流れる」という言い方を思い出した。水道の蛇口やホースから少しずつ流れているときに使う言い方である。子どもの小さく動き回るようすと、水が流れる「ちょろちょろ」とはどのように関係するのだろうか。

2. 辞書にみる「ちょろちょろ」

2.1 国語辞書

まず、机上版の国語辞典で、「ちょろちょろ」の意味記述について調べてみた。

A 岩波国語辞典 第6版

- ① 液体がほそぼそと流れる、または出るさま。
- ② 小さな炎を出しているさま。「－(と)燃える」
- ③ 小さいものが動き回るさま。「ねずみが－する」

B 現代国語例解辞典

- ① 少量の液体の流れるさまを表わす語。
- ② <する>小さなものが動きまわるさまを表わす語。うろちょろ。
- ③ 小さな炎のわずかに上がっているさまを表わす語。ちろちろ。

C 三省堂国語辞典 第7版

- ① わずかな水が流れるようす。「小川が－(と)流れる」
- ② 小さなほのおをあげているようす。「まだ－(と)もえている」
- ③ 小さいものがすばやく動き回るようす。「ネズミが－(と)走り回る」

D 新明解国語辞典 第7版

- ① わずかな量の水が流れたり小さな炎をあげながら火が燃えたりする様子。「始め－中ぱっぱ赤子泣くとも蓋取るな〔＝かまどの火で飯を炊く時の上手な炊き方を言う

語]

- ② 小さな物がせわしなくあちらこちらへと動き回る様子。「庭先を一走り回るリス」

E 新選国語辞典 第10版

- ① 水が少しずつ流れるようす。
② すばしこくうごきまわるようす。「ねずみが一走る」

F 明鏡国語辞典 第3版

- ① 水が少しずつ流れるさま。「岩間から一(と)わき出る清水」
② 小さな炎を出して燃えるさま。「薪が一(と)燃える」
③ 小さなものがすばしこく動き回るさま。「壁穴からねずみが一(と)出てくる」

これらでは、E『新選国語辞典』を除くと、「ちよろちよろ」と表現される対象としては、主に「水や液体」「炎」「小さいもの」の3種類が認められる。これを踏まえて整理すると、次のようになる。

	水や液体 (用例)	炎 (用例)	小さいもの (用例)
A	① 液体	②	③ (ねずみ)
B	① 液体	③	②
C	① 水 (小川)	②	③ (ネズミ)
D	① 水	① (炊飯)	② (リス)
E	① 水		② (ねずみ)
F	① 水	② (薪)	③ (ねずみ)

どの辞書も、第一番に挙げられているのがいずれも「水や液体」である。また、その説明には「ほそぼそと」「わずかな量」「少しずつ」といった語が使われている。これらから、水や液体が少しずつ流れるようすを表すのが「ちよろちよろ」の中心的な意味だと思われる。

「炎」については、「小さな」ことが共通する。また、D『新明解国語辞典』では、水と一緒にまとめられている。

それに対して、「小さなもの」は「小さい」ことが前提で、「動き回る」という点で共通している。辞書の用例ではネズミやリスなどの小動物であった。

2.2 擬音語・擬態語辞典

次に、擬音語・擬態語の辞典を調べた。

G 天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』(1996、東京堂)

- ① やや、こう配はあるが、水量がごく少ない流れ、水深が極めて浅い流れなどを、水が、ある程度の速さで、流れる時などに出る音。また、その様子。

〔例〕▶ (前略) 流れている谷川の～いう水音が、時には、びっくりするほど大きな音に聞こえる。

- ② (小さな) 物事・現象の動き・量・程度などが少ない、小さい、細かい様子。それらが、少し、わずか、小規模などである様子。

【筆者注】この語釈の後に、〔例〕として新聞記事からの用例が19例挙がっていた。紙面の都合で省略するが、「ちょろちょろ」と表現される対象は以下の通りであった。

断水時の水道の水〔3例〕、温泉や風呂のさし湯〔2例〕、池の水
暖炉の火、かまどの火、静まりかけた火事の火
かみなりの光
都心の電車のスピード、土地開発のスピード
ネズミの動き〔2例〕、台所のゴキブリの動き
横転したトラックから逃げ出した子ブタの動き、逃げ回る子だぬきの動き
やまかがしの舌の動き
弟の行動

H 山口仲美編『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』(2003、講談社)

- ① 水などの液体が少しずつ流れる音や様子。また、液体にかかわらず量や程度がわずかな様子。「廊下のすぐ下をちょろちょろと流れる水の音にも佇ずんだ」(夏目漱石『思ひ出す事など』)、「本日は朝から敵機がちょろちょろ入って来ると思ったら」(海野十三『敗戦日記』)
- ② 小さな炎が小刻みに揺れ動く様子。「ちょろちょろと燃える本節の囲炉裡火」(有島武郎『生れ出づる悩み』)
- ③ 子どもや小動物が動き回る様子。また、人が小刻みに動く様子。「一寸ばかりの蟻螂が斧を擡げてちょろちょろと歩き出した」(長塚節『上』)

◇類義語「ちょろっ」「ちょろり」

共に①②③の類義語。音や小さな動きが繰り返される「ちょろちょろ」に対して、「ちょろっ」は「ちょろっとなしゃべってしまった」のように瞬間的な様子に言い、時間の短さが強調される。「ちょろり」は一回限りの様子で、わずかな程度や時間と共にその現れ出た結果が強調される。

◆参考 ①②は室町時代から見える。「松火をちょろちょろとたくが」(『三体詩抄』)

Gの分類は、国語辞典と少し異なっている。①では水の流れに限定していて、②でさまざまな対象が含まれている。①が基本的な場合で、②は、①における「少ない、小さい、細かい」要素が、自然の水の流れ以外に及んだ場合であろうか。とにかく、その「少ない、小さい、細かい」という要素が「ちょろちょろ」には大事な要素だというわけで、この点は国語

辞典と同じである。なお、②に「弟の行動」が含まれているが、実際には次のように書かれていた。

▶弟はいつでも～しているうちにどこかへ行ってしまうので、まいごになったのかと心配しています。〔毎日 47. 10. 18〕

本文の「はじめに」で示した電車内の子どもの行動に近いものである。

H では、国語辞典の多くの辞典とほぼ同じ分類である。多くの国語辞典での3つめは「小さいもの」であったが、この H の③では、「子どもや小動物が動き回る」「人が小刻みに動く」場合として挙げられている。そして、「参考」にもあるように、③は新しい用法ということである。

3. 子どもの「ちょろちょろ」

以上から、「ちょろちょろ」と表現するには「わずか、小さい」ことが条件だと考えられる。そして、「動きのある」ことも必要なのだが、本来の水の流れのような直線的な動きに加えて、炎のような揺れも「ちょろちょろ」にあてはめられるようになった。そこから、「小さなもの」が「揺れ」に似た動きとして、広くない範囲で「動き回る」場合も「ちょろちょろ」と言うようになったのではないか。水や炎は「ちょろちょろ」というようすを表す副詞であるが、小さなものの動きには、「ちょろちょろする」というサ変動詞としても使われる。

以上から、「ちょろちょろ」は人にも使えるが、人に使う場合、大人ではなく「小さな」子どもに使うことになる。また、子どもに使うというのも、子ども自身が「自分がちょろちょろする」ということはなく、他人から、多くは大人から子どもに向かって使うことばだと考えられる。

冒頭の、母親が「ちょろちょろしないの！」と言ったシーンを想像してみる。子どもは軽い気持ちで遊んでいる。「ちょろちょろ」しているつもりはもちろんない。しかし、母親から見れば、通勤電車の中で小さな子どもが勝手に動き回っているように見える。そして周りに迷惑になるから無意味に動かないでほしいと思い、「ちょろちょろしないの！！」と言ったと考えられる。

4. 「ちょろちょろ」の周辺

辞書類で、水・液体や炎以外で扱われていたものは、小動物や子どもが中心だった。つまり、生き物だったが、実は生き物以外の場合もある。おもちゃ通販を扱う「タカラトミーモール」の Web サイト (<https://takaratomymall.jp/shop/c/cChoroQ/>) を見ると、玩具「チョコロ Q」の説明には、次のように書かれている。

チョコロチョコロ走るキュートな車！「チョコロ Q」から新ラインナップが続々登場！

続々登場しているチョコロ Q のラインナップに「チョコロ Q PUI PUI モルカー 01 ポテト」

(<https://takaratomymall.jp/shop/g/g4904810203728/>) があり、その商品説明には、次のように書かれている。

「チョコチョコ走って、キュートなクルマ」のチョコ Q に、『PUI PUI モルカー』のポテトが仲間入り！

プルバックでゼンマイを巻き、手を離すと、トコトコとボディを揺らしながら直進走行します。

ここで、「チョコチョコ走る」「トコトコとボディを揺らしながら直進走行します。」とあるのは、スピードのある直進走行ではなく、小さな車が小刻みに揺れている様子であり、ネズミヤリスとおなじ「小さなもの」が「動き回る」に該当する。

5. まとめ

水や液体が少しずつ流れるようすを表すのが「ちょろちょろ」の中心的な意味であり、直線的な動きに加えて、炎のような揺れも「ちょろちょろ」にあてはめられるようになった。そこから、「小さなもの」が「揺れ」に似た動きとして、広くない範囲で「動き回る」場合も「ちょろちょろ」と言うようになったと考えられる。

水の場合、大河の流れには、「ちょろちょろ」を使わず、少量の液体の流れるさまに、「ちょろちょろ」を使う。大河の流れは大きなこと、重要なことであり、ホースから少しずつ流れているのはあまり重要とされていないと考えられる。大人が意志を持ってする行動には、大河の流れと同じように重要なことと考えられるため「ちょろちょろ」とは使わない。他方、子どもの動きに対して意味のないものだと思われがちだと周囲が判断するとき「ちょろちょろする」と使う。

子どもの動き回るようすと、水が流れる「ちょろちょろ」の関係は、大きな意味の感じられる流れ、しっかりした意思のある行動には使わず、少量、わずか、小さいものに対して周囲が重要でないことと判断するときに使われるといえよう。

6. おわりに

「ちょろちょろ」について調べるうちに、大人に対しても使っていることが分かった。例えば、母が「あの子（母の弟）、ちょろちょろしてるなどと思ったら、ユキちゃん（筆者）への土産を探していた」や、先輩が後輩に対して「何ちょろちょろしてんねん」と言うなどだ。

母に「ちょろちょろ」について調べて分かったこと（水、炎、子どもや小さな動物等に向かって使うコトバらしい）を伝えると、「あっそうだったね」と言われた。母が違和感を覚えながらも「ちょろちょろ」を弟に対して使うことで、聞き手である私にはその場面が詳しく想像できた。また、「ちょろちょろ」を大人に使うことで、その人物に対する好意的もしくは親しみのある気持ちも伝わった。

「ちょろちょろ」を調べるうちに、私の口から「ちょろちょろ」がよく出るようになった。

しかし、自分に対して使ってしまったたり、「ちよくちよく」の言い間違いだったり。聞いたことはあるが詳しく知らないコトバを調べて、どんどん使っていくことは、面白いと思った。また、多少の違和感を覚えても、相手に伝えたい内容がしっかり伝われば、それも良いのではないか思うようになった。

人の話しているコトバの意味について考えるのは、通勤電車や街や家でもどこでもできる楽しい時間である。そして、次の日本語塾の話題にしようと思うとワクワクする。これからも、コトバについてアンテナを張って日々を過ごしていきたいと思う。

見たヨ・聞いたヨ

こってり中



ラーメン店の幟に「こってり中」とあった。「こってり」とは濃厚なスープを表現しているものと思われる。「準備」や「営業」のようなサ変動詞をとる名詞に「中」を付けて、「現にその活動をしていることを表す」(小学館『大辞泉』)のなるわかるが、動きがなく、状態を表す副詞に付いた「中」。変則的である。しかし、何となくラーメン店の熱意や店内の活況のようなものが伝わってくる。今、まさに「こってり」でやっていますよ、決して薄めたりしていませんからね、と言っているような印象を与える。こってり味が一つのスタイルとして定着したためだろうか、定番をもう一押しする狙いを感じられる。

上野 和美

自宅でのみとり

NHKの朝7時のニュースで、タイトルに「自宅でのみとり増加」とありました。とっさに「自宅で蚤取り増加」と思ってしまいました。

しかし、その内容は「自宅での看取り、増加」でした。なぜとっさに蚤と思ったのかというとそれは猫の存在です。以前飼っていた猫は自由に外をふらつく猫で、よく蚤を体に付けてきたので蚤取りが大変でした。近年のペットブームに伴い蚤とりも増えてきたのかと思ったのです。でも落ち着いて考えれば、今どき猫も家飼いが増え蚤除けの薬もできて「蚤取り」なんて死語のようなものですが、昔のことを知っている人間には、なかなか忘れられない語です。

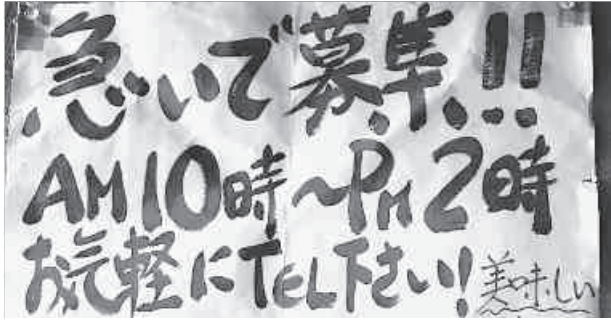
常用漢字表では「看」に「みる」という訓が認められていないために、平仮名で書かれたと思われます。常用漢字表で「みる」と書けるのは「見る」と「診る」だけとのこと。「見取り」ではやはりイメージが違ってしまふから、結局、仮名書きになったのでしょうか。

それでも、漢字で書いてもらえばすっきりするのと思うのは私だけでしょうか。

高野 啓



📷 急いで募集



寿司屋の店先に貼り紙があった。

「急いで募集!!」という表現を見て思わず吹き出してしまった。文章が完結していないので、中途半端だと感じた。その代わりに、軽い感じとリズムを感じた。「急いで募集!!」の軽いリズムで言われたら、「急いで応募!!」の軽いリズムで応えたいくなる。

この表現は、急いで募集しなきゃ!!という店側の焦りがでていいるのではないだろうか。急いでます!!とわざわざ書いて貼りだしてアピールしている。

しかし、この貼り紙に書くことで、店側が急いでいるのだから、応募者にも早くするよう協力を促す効果があるため、「急いで募集!!」という表現が生まれたと考えられる。「スタッフを募集しています」なら、丁寧に落ち着いた印象を与える。高級寿司店風である。「急募」なら、チェーン店風である。「急いで募集!!」は、話しかけるような身近な感じである。

店側の焦りを隠さず伝えることで、応募者にも協力を促し、身近に感じてもらえる表現だと思った。

谷本 由希子

🎓 卒業

朝日新聞の記事に、ある声優が「(テレビ)番組を卒業する」とあった。芸能人などが今の活躍の場を去ることを昨今「卒業」と呼ぶ。「アイドルがグループを卒業する」「アナウンサーが番組を卒業する」はテレビなどでよく聞く表現だが、このような意味で使われだしたのは80年代後半とされる。グループを脱退し、ソロ活動をするようになったアイドル歌手に対して用いられたのが初めらしい。『三省堂国語辞典』を見ると、第六版では「引退」を意味する俗語となっているのが、第八版では俗語の記号が消え、「降板・引退・脱退などの言い換え」と意味の格上げがなされている。降板や引退、脱退には、それはなぜかという理由が付きまとうが、卒業にはない。次のステージがただ待っているというよい印象を植え付ける。誰も傷つかない、あかるい表現として好まれているようだが、視聴者の立場からすると、好イメージへの配慮が時に押し付けがましくもある。気にも留めていないのに「処遇事情を詮索しないで」と言われているようで、「知らんがな」と言いたくなる。新しい用法に私自身がまだなじんでいないのだろう。

上野 和美

かなあとと思います

テレビのニュースで、大阪の病院放火という悲惨な事件の感想を聞かれた女性が「将来のある若い人なのに残念かなあとと思います」と答えていました。ここはぜひ残念です、とか、残念に思います、と断定してほしいところです。

自分の意見を表明するとき、それが自分の感情であれば確信をもって述べるものでしょう。まして、痛ましい出来事に対しては、誰もが「残念」と思うものです。もし、自分の子供がこのような事故にあったとき「残念かなあ」というあいまいな言い方をされると無念でしょう。

最近とみに曖昧な表現が増えている気がします。ネットなどで言葉尻をとらえて叩かれるということもあるので用心深い言い回しになるのですが、曖昧にしても差し支えないものと自信をもって伝えてなければならないものを明確にしておかないと、いわゆる語尾に多少の本音をまぜた「知らんけど・・・」というような言い放しで終わるような気持ちの悪さが残ります。きっと発言している人は何気なく言っているのですが、そのような何気なさが気になります。



高野 啓

「一味」と「一党」

池波正太郎の小説を原作にした時代劇「雲霧仁左衛門」がNHKで放映されている。盗賊のお頭が主人公であるこのドラマで、雲霧仁左衛門とその配下である仲間は「雲霧一党」と称される。ナレーションや人物紹介の字幕はもちろん、雲霧を追う立場の火付盗賊改らまでもがほぼ「一党」と呼ぶ。「一味」ではない。時代背景を説明するナレーションの一箇所でのみ「一味」が使われる。「一味」も「一党」も「なかま」の意だが、「一味」は「特に悪事を企てる仲間」（『明鏡国語辞典』）、「反体制の仲間」（『新明解国語辞典』）と、よからぬ集団として否定的に使われることが多い。

一方、「一党」は中立的である。雲霧が決して人を傷つけず、悪徳豪商から銭を奪うヒーローであることから、「一味」呼ばわりするのはためらわれるのであろうか。雲霧への敬意か、視聴者からのクレームよけか、はたまた主役の中井貴一ら俳優陣に対する気遣いか。ちなみに原作の小説では「一味」である。「一党」は出てこない。「雲霧仁左衛門」は、映画やテレビドラマで何度も映像化されている。どの辺りから「一党」が使われだしたのだろうか、気になる。



上野 和美

📷 枅記号



京都四条通り、南座近くの扇子専門店の店先に「扇子に名入れでき□」と書かれたたスタンド型看板がある。□は「ます」と読む。昔は看板や広告などで見かけた表記で、ある年代以上にとっては懐かしさを覚えるものだろう。「枅(ます)記号」というらしい。釣掛枅(つるかけます)を上から見た形を図案化したもので、江戸時代からあるという。枅は、米を量ったりお供物を入れたりする器なので、商売では縁起物として好まれてきた。その「枅」を絵文字にした使い方。江戸後期に流行した判じ絵の趣向が感じられる。

考えてみるとこの記号は便利である。限られたスペースで効率よく宣伝したい場合、一字でも省略できるのはありがたい。他の字が大きく書ける。文末表現の「です」「ます」なら尚のこと、そこに充てるスペースは、読み手に失礼にならない限り、省きたいと思う。さらに、ひらがなの「ま」「す」は字形としての難しさもある。終筆近くで小さな円を描かなければならない。看板用の太い筆や刷毛を使って円をつぶさないように書くには技が要る。ところが、□なら四角に対角線を入れるだけだ。しかも、枅は商売との相性がよい。ならば利用したくもなるだろう。まさに先人の知恵の詰まった表記である。写真の店舗がいつからこの表記を用いているのかは知らないが、古都の風情で観光客を誘う、いかにも京都の店らしい看板である。

ところが、最近、大阪府下のある駅前でこの表記を見つけた。商店街の外れにオープンした海鮮バーベキューの店が「ジンギス ホルモンあり□」と掲げていた。手書き(風)でもないので、「ます」はその前の「あり」と同じフォントの文字を使えばよさそうなものだ。しかも、スペース的な制限もないように見える。にもかかわらず□である。



最初目にしたときは懐かしい表記をあえて使っているのかと思ったが、どうやらそうでもないらしい。LINE やインスタグラムなどの SNS 上の表記の一つとして、昨今□は使わ

れているようだ。SNS では顔文字や絵文字（もう古いらしい）、省略形などをどんどん進化させて、新しい言葉や表記を生みだしている。変換さえできれば仲間うちのコミュニケーションの道具となる。海鮮バーベキューの店がどちらかという若者向けの店であることを思うと、この☒は、懐かしい☒ではなく、新しいほうの☒ではないだろうか。もっとも、江戸期に枡記号を使い始めた先人も、現代の若者と同様、諧謔的に省略形を活用したのかもしれない。ならば懐かしい☒も、新しい☒も根っこにあるものは同じだろう。

しかしながら、枡記号は縦書きの方がしっくりくと私は感じる。書字方向が左から右の横書きなら、枡の対角線は左上から右下に向かって引く方が自然なのでは……と思うが、こういう指摘は無粋だ。商売に右肩下がりはいくれない。第一、変換しても出てこない。

上野 和美

上積む

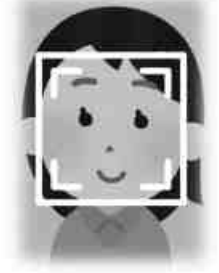
2021 年秋の自民党総裁選挙を振り返る NHK の番組の中で、野党の代表がインタビューに答えて「(現状を) 2~30 議席上積む 140~150 議席 (を視野に入れ)」と言っていた。「上積む」とは「上積み」を動詞にした語であろう。文脈から「2~30 議席上積みした」「2~30 議席の上積みとなる」の意と判断できる。「上回る」との混淆の可能性もあるが、最近、このように複合名詞の動詞化表現をしばしば耳にする。就職活動中の学生からは「(面接での質問で) 深掘られる」、新型コロナのワクチン接種について話す政治家からは「(3 回目接種を) 前倒す」という言葉を聞いた。

これらは「上積み (を) する／」「深掘り (を) される」「前倒し (を) する」を端折った表現である。「上積み」「深掘り」「前倒し」はいずれも複合名詞であり、下の成分である「積み」「掘り」「倒し」は動詞から転成した名詞である。さらに、上の成分の「上」「深」「前」はそれぞれ連用修飾語の働きをしている。これらの語は、上の成分をそのままの形で残しつつも動詞としての活用を利用する、一種の「先祖返り」のような表現である。「書き直す」「押し出す」「食べ始める」など、二つの動詞が重なる複合動詞が「書き直し」「押し出し」「食べ始め」と活用できることから、その理屈を当てはめたものとも考えられる。省けるところは省いて能率よく伝えたいという意識が働くのであろうか。効率化現象の一つといえよう。

上野 和美

失敗されました

ある仕事のこと。業務を行う部屋はもちろん休憩室の出入りにもチェックが厳重で、最近になって暗証番号入力から虹彩認証にランクアップ(?)された。両目でカメラを見つめるとドアが解錠され、その後で女性の声で「認証されました!」と教えてくれる。その無駄と間の悪さは我慢するとして、何が気にいらぬのか頻りに「認証に失敗されました!」と廊下に響き渡るほどの声で叫ぶのだ。この「されました」とはいったいどういうことなのか。敬語? 受け身? いずれにしても不快である。



東村 洋子

「組んずほぐれつ」の表記は「わかりづらい」

ロシアによるウクライナ侵攻の可能性が取りざたされる中、朝日新聞の「素粒子」で「米ロ両国は組んずほぐれつの情報戦」とあるのを目にした。「組んず」の「ず」が「づ」でないことが気になった。「組みつほぐれつ」の音便形なら「組んづほぐれつ」だろうと思ったからだ。辞書を引くと、連語の見出し語としては確かに「組んず解れつ」で、『くみつほぐれつ』の転とあった。さらに、表記上の注意として「現代仮名遣いでは『くんづほぐれつ』も許容」と説明されていた。どうして「ず」が正式で「づ」が許容扱いなのかと思うが、これは「稲妻(いなずま)」や「頷(うなず)く」と同様なのである。語源がどうあれ、“合成意識”が薄れ、もはや一語だと認識されるようになると、元の表記から変わってしまうことがあるのだ。そして優勢になった方が、内閣告示「現代仮名遣い」(昭和61年、平成22年一部改正)の本則の地位を得る。本則とならなかった方も「許容」という形で収まる。「組んずほぐれつ」も、連語として一まとまりだ、とみなされたわけである。



それなら「わかりづらい」という語も将来的には「わかりづらい」になる可能性がある。かねがね自動詞である「わかる」に「づらい」を付けて表現することに抵抗を感じていた。「わかりにくい」でよいではないか、「わかる」に「づらい」も「つらくない」もないではないか、と。しかし「わかりづらい」派は日々勢いを増している。今やテレビのアナウンサーでも普通に使う。ならば、いっそのこと「わかりづらい」と表記してもらった方が潔い。「わかりにくい」派も諦めがつくというものだ。「合成された語であることがわかりづらいためにこうなった」などと説明される日は、果たして来るのだろうか。

上野 和美

《記 録》

開講場所：武庫川女子大学言語文化研究所 研究所棟 I-609

開講日時：

第1回 2021年6月12日(土)
10時30分～12時30分



第2回 2021年7月17日(土)
10時30分～12時30分



第3回 2021年11月2日(土)
10時30分～12時30分



第4回 2021年12月18日(土)
10時30分～12時30分



第5回 2022年2月19日(土)
10時30分～12時30分



《LC 倶楽部会員から研究所歌の寄贈》

竹腰純さんと松本卓也さんから「武庫川女子大学言語文化研究所歌」（作詞：竹腰純、作曲：松本卓也）をご寄贈いただきました。竹腰さんは本号でレポートも執筆されています。ここに歌詞と楽譜を掲載し、お二人に感謝の気持ちを表します。

《歌詞》

武庫川の 清き流れに 棹をさし 理想の未来 切り開く 絆強める
言の葉に 愛する友と 巡り合う ああ 我らの 言語文化研究所

Score

武庫川女子大学言語文化研究所歌

作詞：竹腰 純
作曲：松本卓也

Moderato (♩=80) D

Score for 'Bunkyo University of Women Language and Culture Research Institute Song'. The score is in G major (one sharp) and 4/4 time. It consists of 23 measures. The tempo is Moderato (♩=80). The key signature is G major. The score includes lyrics in Japanese and chord symbols (D, A, G, A/C#, Bm, G) above the notes. The lyrics are: 武庫川の 清き流れに 棹をさし 理想の未来 切り開く 絆強める 言の葉に 愛する友と 巡り合う ああ 我らの 言語文化研究所. The score ends with a double bar line and a fermata over the final note.

4 A G

8 D A G

11 A D A/C# Bm G

15 A D

19 A G A D

23

C

企画・開催 佐竹秀雄（本研究所研究員） 岸本千秋（本研究所助教）
レポート指導 佐竹秀雄 岸本千秋
開催補助 向井弥生（本研究所職員）

オトナのための日本語塾
レポート集 2021

刊行 2022年3月31日
編集 佐竹秀雄 岸本千秋
〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6-46
武庫川女子大学言語文化研究所
電話 0798(45)3536
FAX 0798(45)3574
Mail ilc@mukogawa-u.ac.jp
URL <http://www.mukogawa-u.ac.jp/~ILC/>
発行 武庫川女子大学言語文化研究所
印刷 大和出版印刷株式会社
